

## 下鴨神社



下鴨神社

( <http://www.shimogamo-jinja.or.jp/> による)

正式には「賀茂御祖神社（かもみおやじんじゃ）」とよびます。京都は鴨川を中心に町づくりがなされており、鴨川の下流にまつられているお社というところから「下鴨（しもがも）さん」とか「下鴨神社（しもがもじんじゃ）」と親しくよばれています。東西の両本殿はともに国宝に指定されています。

賀茂建角身命（かもたけつぬみのみこと）	西 殿
玉依媛命（たまよりひめのみこと）	東 殿

賀茂建角身命は、古代の京都をひらかれた神さまです。山城の国一宮として京都の守護神としてまつられています。平安京が造営されるにあたって、まず当神社に成功のご祈願が行われました。以来、国民の平安をご祈願する神社と定められました。山城国『風土記』などに、玉依媛命が鴨川で禊（みそぎ＝身を清める儀式）をされているときに、上流より流れ来た丹塗の矢を拾われて床におかれたところ、矢は美しい男神になられ、結婚された。

そしてお子をお生みになったとの神話が伝えられていますので、古くから縁結、子育ての神さまとして信仰されています。当神社は、国家国民の安穏と世界平和をご祈願する守護神であるとともに、厄除、縁結、子宝、安産、子育て、交通安全など人々の暮らしを守る神さまです。

以上は公式ホームページによる記述であるが、この神話の意味するところはどのようなことであろうか？

この神話に関連する文献として「秦氏本系帳（はたうじ・ほんけいちょう）」がある。奈良時代後期以降、各氏族に書かせた氏族系譜がある。814年に「新撰姓氏録（しょうじろく）」としてまとめられた。「秦氏本系帳」はその中の秦氏（はたうじ）の作ったものである。その「秦氏本系帳」に上記の神話に類似の話が記述されている。

昔々、秦氏の娘が葛野川で洗濯をしていた。すると、上流から矢が一本流れてきた。彼女はそれを持って帰り、戸上に刺しておいた。やがて、娘はひとりで懐妊。男の子を産んだ。あるとき宴会を開き、秦氏の祖父母が男の子に向かって、父親に酒を飲ませよと言った。すると、男の子は、戸上の矢を指差しこれすなわち雷公と言い、そのまま天井をつきぬけて、天に昇っていった。これにより、鴨上社は別雷神とし、鴨下社は御祖神と称す。戸上の矢は、松尾大明神である。以上、これら秦氏三所明神として奉祭（ほうさい）する。しかして、鴨の氏人は秦氏の婿である。秦氏は愛する婿のために、鴨祭を譲与する。今日、鴨氏が禰宜（ねぎ＝神官）として奉祭するのは、この縁があるためである。

これから分かるように、賀茂氏の「丹塗り矢伝説」と違うのは、玉依姫が秦氏の娘になっている事で、秦氏の娘の婿は火雷神（日本神話の火の神）であり、娘婿ゆえ、秦氏は松尾大社を創建して、火雷神を祀ったことになっている。その火雷神が鴨上社（上賀茂神社の神）の別雷神（わけいかずちのかみ）である。

また、突然に賀茂氏が登場し、鴨上社（上賀茂神社の神）の別雷神（わけいかずちのかみ）は秦氏にとって娘婿で、愛するが故に、それまで秦氏が行ってきた葵祭りを賀茂氏に譲ったとしており、松尾大明神＝火雷神が賀茂氏の祭神となります。

これから判るように、賀茂玉依姫 ＝ 秦玉依姫 であり、秦氏と賀茂氏は一体である。

陰陽道の元祖は賀茂氏だが、その賀茂一族のルーツというか本願地は葛城である。葛城は、広くは蘇我一族や聖徳太子一族など百濟系の本拠地であり、いふなれば仏教伝来のふるさとみいたいところである。葛城といえば「役の行者」だが、役の行者は賀茂一族だと考えられているし、そういう意味では、葛城は、修験道の源流にあると同時に、陰陽道の源流でもある。

何時のころか、葛城山麓を離れた鴨族の一派が奈良盆地を北上し、奈良山を越えて加茂町まで勢力を伸ばし、さらに現在の京都の上加茂、下加茂の辺りにまで進出して定着して鴨氏になったとされている。一方、『新撰姓氏録』によれば、応神14年に渡来したとされる秦氏も当初は「大和朝津間腋上地（わきがみのち）」に住んだようだ。腋上は秋津のすぐ近くである。秦氏も鴨族の移住と時を同じくして、京都盆地に入り込んだと思われる。北葛城にいた葛城氏が紀州への路を確保するために南葛城に進出してきたのであれば、古代氏族の鴨氏や渡来氏族の秦氏との軋轢がこの地方で起きたと想像するのは、それほど突飛ではあるまい（ <http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/yamatai05.pdf> より）。

秦氏は京都盆地の鴨川、桂川などの氾濫原の開拓の中心となり、賀茂・松尾・稲荷などの神社とも深い関係を持ったのである。

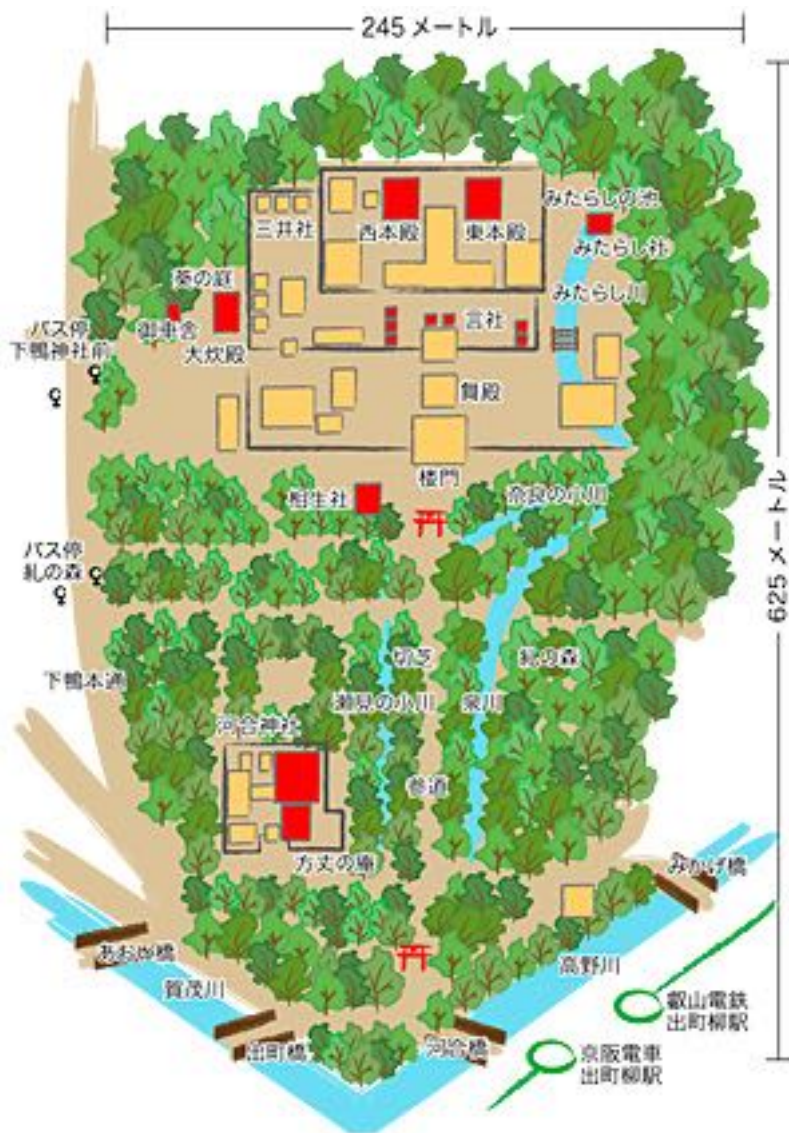
上賀茂神社と下賀茂神社と・・・京都は遙か西の方、嵐山というか桂川の向こうにある松尾神社、この三つの神社が秦氏が祀った三所大明神と言われている。上賀茂神社と下賀茂神社とは言うまでもなく一体のもの。したがって、賀茂神社と松尾神社が秦氏を通して一つになっていることは大変興味のあることである。

上述したように、賀茂建角身命は、古代の京都をひらかれた神さまであう。山城の国一宮として京都の守護神としてまつられているのである。平安京が造営されるにあたって、まず当神社に成功のご祈願が行われた。

一方、秦氏も、山背（やましろ）の地方豪族として平安遷都に尽力する。その際、損野広隆寺の敷地を平安遷都のために朝廷に提供し、寺を太秦に移転させるのである。

（ <http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/kouryuujini.pdf> による）

平安遷都は秦氏と賀茂氏一体となって初めて出来た大事業であったと思う。



下鴨神社境内図

( [http://micro.rohm.com/jp/rohm-saijiki/shimogamo/seasonview\\_shimogamo.html](http://micro.rohm.com/jp/rohm-saijiki/shimogamo/seasonview_shimogamo.html) による)

註： [http://micro.rohm.com/jp/rohm-saijiki/shimogamo/seasonview\\_shimogamo.html](http://micro.rohm.com/jp/rohm-saijiki/shimogamo/seasonview_shimogamo.html) の下鴨神社境内図をクリックすると大き図が出てくるので、字も大きくて見やすい。まず、「奈良の小川」と「方丈の庵」に注目願いたい。

下鴨神社にある糺の森は平安京遷都以前の山城盆地の森の様相を残し、古代遺跡も埋蔵する貴重な国指定史跡となっている。2001年からの発掘調査で12世紀後半の祭祀跡が検出され、「奈良の小川」近くに復元保存されている。神社が力を入れて復元したこの祭祀遺構を参拝の折にはぜひ見学してください。



以上の写真は、ホームページ [https://kioto-syokai.at.webry.info/201307/article\\_8.html](https://kioto-syokai.at.webry.info/201307/article_8.html) によるが、賀茂斎王が葵祭を前にしてお祓いの神事を行った場所であり、「奈良の小川」の中に「舟」形の小さな島を作り、磐座（神の降臨するところ）としたものらしい。

「奈良の小川」は聖なる川である。

「方丈の庵」は、鴨長明が隠遁生活をした庵である。

<https://blogs.yahoo.co.jp/kay31527/33332407.html>

では、糺の森（ただすの森）の四季折々の風景を紹介しておきたい。



では、最後に下鴨神社における行事を紹介しておこう。

## 下鴨神社の流鏝馬

<https://www.youtube.com/watch?v=1XPF6UD1190>

下鴨神社の流鏝馬神事2018は京都の春の風物詩です。流鏝馬神事は毎年5月3日に行われています。流鏝馬神事は5月15日に行われる葵祭の前儀として最初に行われる下鴨神社の行事です。流鏝馬神事では葵祭が安全・平穏無事に行われるように沿道を祓い清めます。流鏝馬では馬場に3つの的を設置し、射手が走る馬の上から矢を放っての的を狙います。

## 糺の森・光の祭り

<https://www.teamlab.art/jp/e/shimogamo-lightfestival2018/>

## 下鴨神社みたらし祭り

<http://tokotokoto.com/?p=6869>

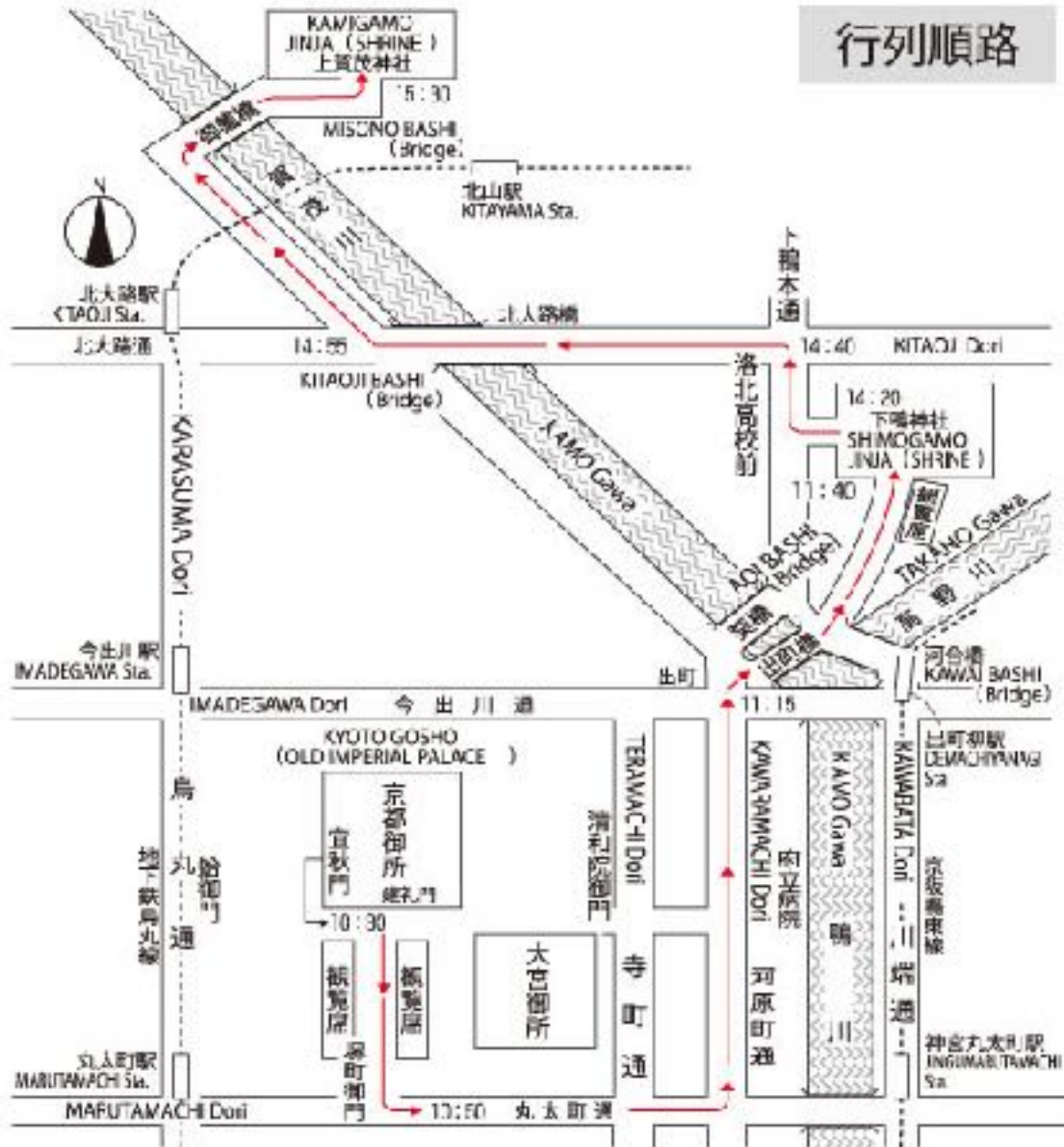
下鴨神社の行事のハイライトは何と言っても葵祭である。

## 葵祭

葵祭 斎王代御禊の儀： <https://www.youtube.com/watch?v=vL6GtEpWih8>

行列： <https://www.youtube.com/watch?v=KfwksoxjGJ4>

葵祭は京都三大祭のひとつで、わが国の祭のうち最も優雅で古趣に富んだ祭として知られています。古典行列は平安貴族そのままの姿で列をつくり、京都御所を出発、総勢500名以上の風雅な行列が下鴨神社を経て、上賀茂神社へ向かいます。



斎王（さいおう）は、伊勢神宮または賀茂神社に巫女として奉仕した未婚の内親王（親王宣下を受けた天皇の皇女）または女王（親王宣下を受けていない天皇の皇女、あるいは親王の王女）。伊勢神宮の斎王は特に斎宮（さいぐう）、賀茂神社の斎王は特に斎院（さいいん）と呼ばれた。



現在、葵祭で齋王代（齋王の役をやる人）が禊の儀式をやるのは下鴨神社であるが、伊勢神宮または賀茂神社に巫女として奉仕する齋王（さいおう）は、どこでどのように身を清めたのであろうか？

齋王は、「神に近づく」ために世俗からの隔離措置が取られ、最初の一定期間を宮中内に設けられた初齋院（伊勢神宮齋宮は1年間、賀茂神社の齋院は3年間）にて潔齋を行い、その後、野宮に籠って潔齋を続ける他、各種の儀式を行った。野宮の多くは取り壊されたので、現在残されているものは少ないが、そのいくつかを紹介しておきたい。

齋宮神社：<https://blogs.yahoo.co.jp/hiropi1700/18062040.html>

西院野々宮神社：<https://kyotofukoh.jp/report457.html>

嵯峨の野宮神社：<http://www.nonomiya.com/>

では最後に、嵯峨の野宮神社を舞台として展開する御息所の話を紹介しておこう。話は葵祭から始まる。

葵祭の加茂川での齋院御禊見物の折に、葵の上の牛車と鉢合わせし、場所争いで葵の上方の下人に恥辱的な仕打ちを受けた。これが発端で御息所は生霊となって妊娠中の葵の上を悩ませるが、それを源氏に目撃される。御息所が、己の髪や衣服から芥子（悪霊を退けるための加持に用いる香）の匂いがするのを知って、さては我が身が生霊となって葵の上に仇をなしたか、と悟りおののく場面は源氏物語前半のクライマックスのひとつである。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/miyahanasi.pdf>